

速報：モニタリングサイト 1000 陸水域調査（湿原）植生調査

サロベツ湿原 サイト

ー北海道天塩郡ー

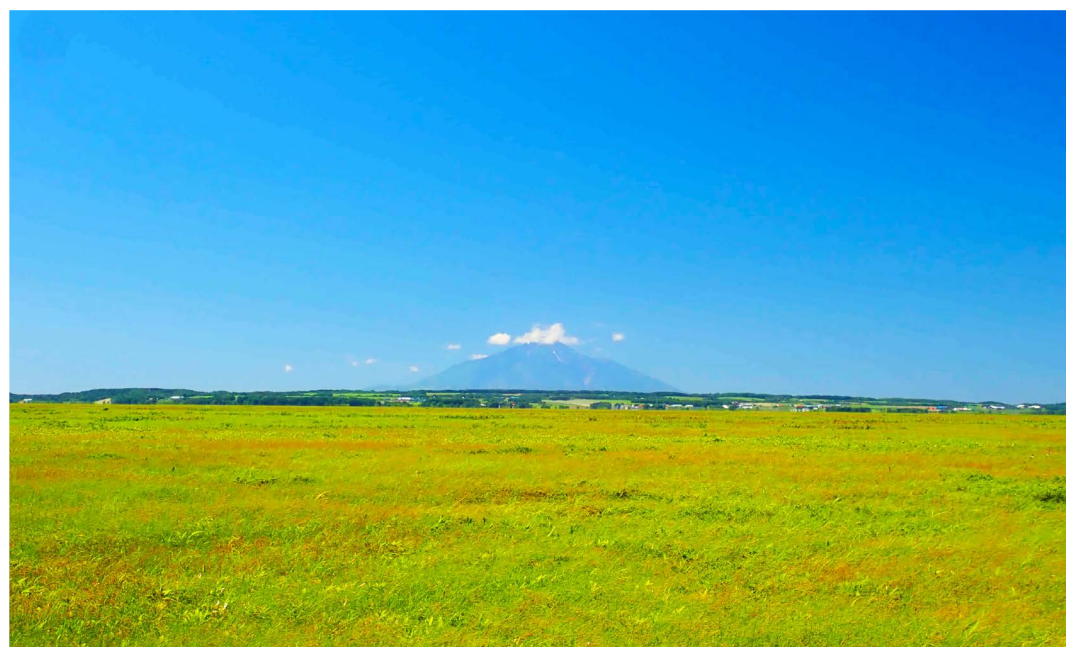
サロベツ湿原は、北海道北部のサロベツ川流域に広がる泥炭地湿原で、広大な湿原に加え、海岸側には海浜植生に続き、学術的にも貴重な砂丘林と砂丘間湿地・湖沼群が広がっています。多彩な植物群落が分布しており、湿原内で見られる維管束植物は 360 分類群にもものぼります。本サイトでは、サロベツ原生花園旧園地付近と泥炭採掘跡地近傍の 2 箇所に調査地を設置しています。湿原の開発や河川改修等の影響で湿原の排水・乾燥化が進行し、高層湿原や中間湿原へのチマキザサの侵入が問題となっています。



ヤマドリゼンマイ。



タチギボウシ。



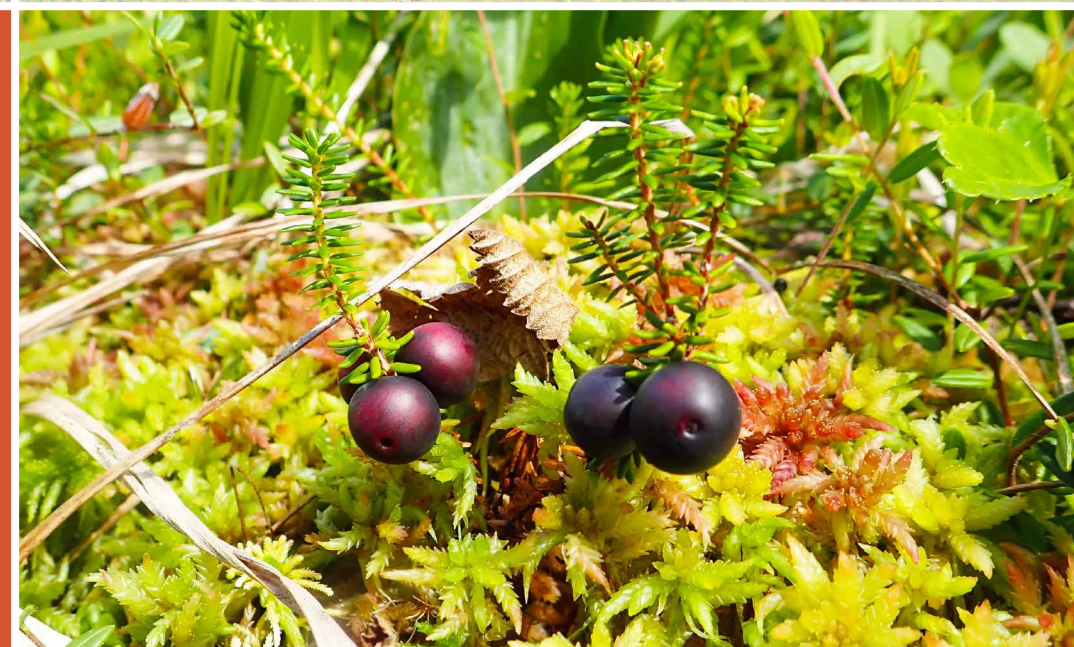
サロベツ湿原の景観。前方に利尻山を望む。

2017 年度の調査結果概要

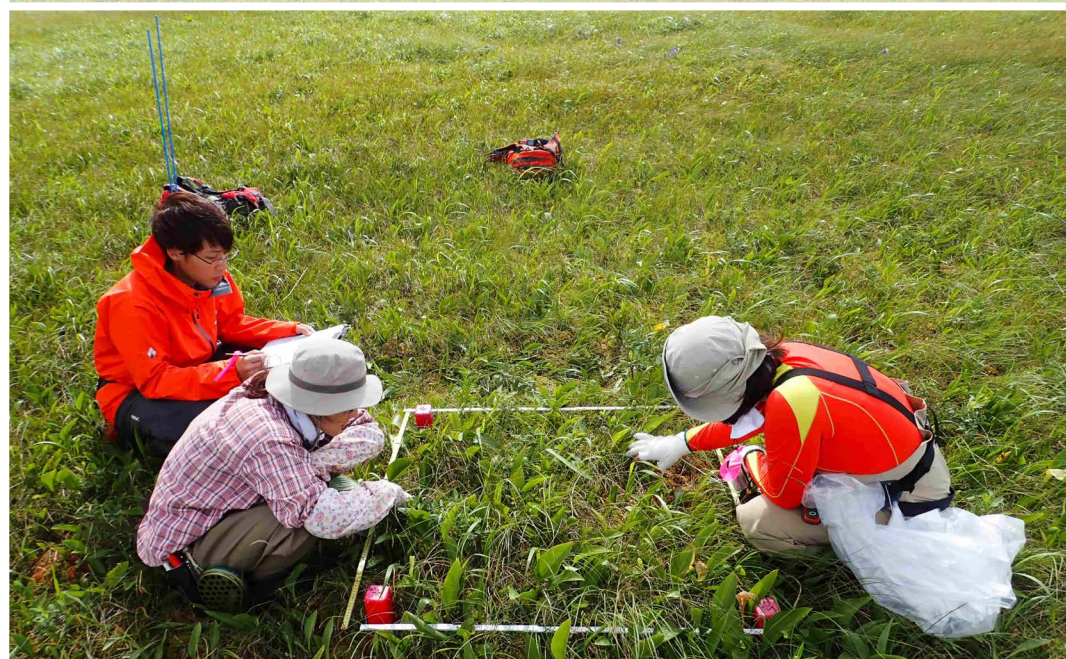
植生調査を 7 月 25 日～ 26 日に実施しました。サロベツ湿原サイトでは、これまで、2009、2012、2014 年に植生調査を実施しており、今回で 4 回目となります。植生調査の結果を見ると、出現植物の被度は、調査当年やその前年の天候などに左右されるので、変動がありますが、全体としては大きな変化は見られませんでした。サロベツ原生花園旧園地付近の調査ラインは、湿地溝（湿原の自然の排水路）に近いササが優占する場所から典型的な高層湿原に向かうラインです。本調査ラインではササが出現しなくなる手前の 2 つの方形区のササの被度が 2009 年と比べると次第に高くなってきています。下エベコロベツ川の改修の影響が見られる泥炭採掘跡地近傍の調査ラインでも、ササの被度が明らかに増加している方形区があるので、今後もこれらについては注視する必要があるでしょう。

【調査者・調査協力者】

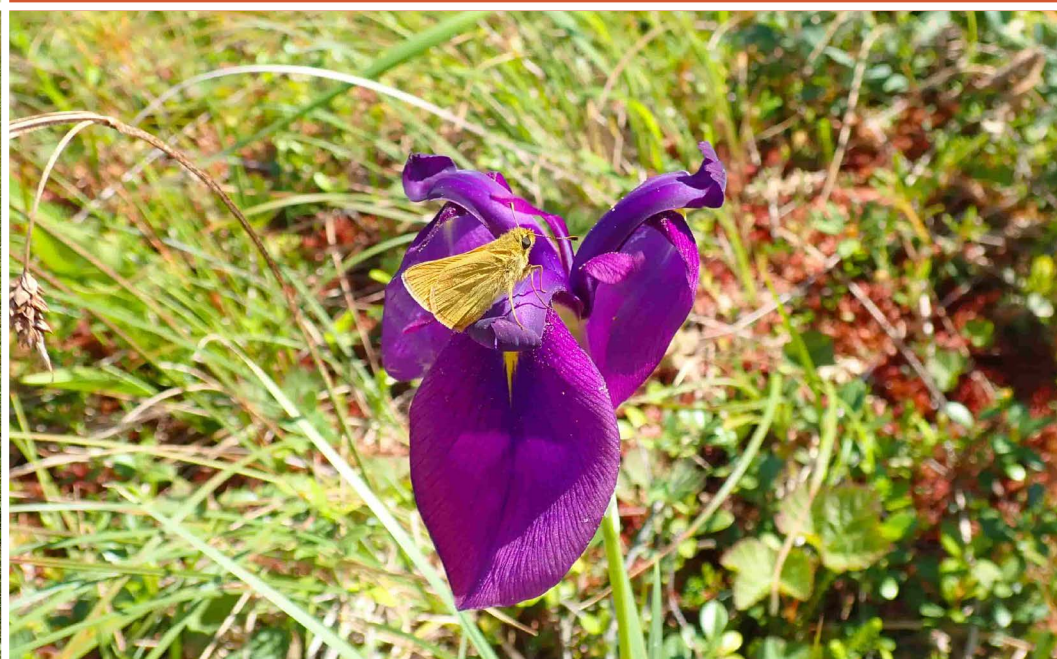
富士田裕子・李 娥英（北海道大学）、加藤 将・井藤大樹（日本国際湿地保全連合）



ガンコウランの果実。



方形区内の植生を調査する様子。



ノハナショウブ。



混生するミズゴケ類
（ムラサキミズゴケ、イボミズゴケ、チャミズゴケ）。

速報：モニタリングサイト 1000 陸水域調査（湿原）植生調査

霧多布湿原 サイト

ー北海道厚岸郡ー

霧多布湿原は北海道東部の太平洋に面して広がる、国内では3番目の広さの湿原です。この地域は、日本で最も冷涼な地域であるため、低地でありながらツルコケモモやガンコウラン等の高山でも見られる植物が多く生育しています。5月から8月にかけては、ワタスゲの綿毛や、ゼンテイカ、ノハナショウブ、タチギボウシ等の様々な花が見られ、多くの観光客が訪れています。湿原の一部は「霧多布泥炭形成植物群落」として国指定の天然記念物に指定されており、ラムサール条約湿地としても登録されています。また、湿地を守る運動として日本で初めてナショナルトラスト運動が導入された湿原であり、様々な形で保護の取り組みが行われています。



ナガボノシロワレモコウ。



タチギボウシ。

2017 年度の調査結果概要

霧多布湿原サイトは、今年度より新たに加えられたモニタリングサイトです。8月12～13日、植生調査を行う方形区を設置し、調査を実施するとともに、物理環境（地下水位、気温、地温）の自動測定機器を設置しました。調査地全体はヌマガヤ、ムジナスゲ、ワタスゲを主体とする中間湿原で、調査ラインの途中からパッチ状にチャミズゴケ・スギゴケからなる直径1～2m くらいのブルテ（小凸地）が発達していました。ヌマガヤ湿原にはほかにヤチャナギ、ツルコケモモ、ヨシ、ナガボノシロワレモコウが全体に出現し、シュレンケ（小凹地）やその周辺ではミカヅキグサ、ヤチスゲ、ユガミズゴケなどが、イボミズゴケやワタスゲの優占度が高い場所ではタチギボウシ、ヒメシャクナゲが見られました。チャミズゴケ・スギゴケからなるブルテの上にはカラフトイソツツジ、ガンコウラン、モウセンゴケが見られ、ブルテごとに優占する維管束植物の種類が異なっていました。

ヌマガヤ湿原、チャミズゴケブルテともに、乾燥が進んだ方形区ではノリウツギやススキの侵入が見られました。特にススキはかつて馬の放牧地として湿原を用いた時の名残の植物で、今後の変化が注目されます。

【調査者・調査協力者】加藤ゆき恵（釧路市立博物館）、河内直子・辻 ねむ（霧多布湿原ナショナルトラスト）、富士田裕子（北海道大学）、樋口正信（国立科学博物館）、加藤 将（日本国際湿地保全連合）

霧多布湿原の景観。調査地まで徒歩で移動する様子。



調査地のところどころに見られた直径1～2m のチャミズゴケブルテ（小凸地）。



方形区内の植生を調査する様子。



ノリウツギ。つぼみがピンク色の個体が見られました。



チャミズゴケブルテ上に生育する様々な植物。スギゴケ、カラフトイソツツジ、ガンコウラン、モウセンゴケ等。

速報：モニタリングサイト 1000 陸水域調査（湿原）植生調査

八甲田山湿原 サイト

－青森県十和田市－

青森県南部に位置する火山群である八甲田山系には、低標高域から高標高域まで、小規模な湿原が多く点在しています。世界でも有数の豪雪地帯であり、湿原群は過去の火山活動や積雪の影響で成立した環境であると考えられています。八甲田山湿原サイトでは、硫黄岳（標高 1,360 m）及び石倉岳（標高 1,202 m）の南部に位置する高田谷地湿原に調査地を設定し、6 箇所各 20 m の調査ラインを設定し、それぞれ 5 個の方形区（計 30 方形区）を設置しています。



キンコウカ。
調査地の多くの場所で見られました。



ウメバチソウと訪花昆虫。



高田谷地湿原の景観。

2017 年度の調査結果概要

植生調査を 8 月 25 日に実施しました。八甲田山湿原サイトでは、これまで、2009・2011・2014 年度に植生調査を実施しており、今回で 4 回目となります。今回の調査では、38 種が確認されました（2009 年は 34 種、2011 年は 32 種、2014 年は 35 種）。全体的には、ヌマガヤ、ミヤマイヌノハナヒゲ、ワタスゲが優占しており、前回調査と比べて、種組成に大きな変化は見られませんでした。ただし、前回の調査時にも見られた、湿原の入り口付近でのヨシの生育はより目立つようになっていました。また、トランセクトごとに見ると、一部のトランセクトでは前回と比べて、トランセクト上で出現する種数が平均で 2 種ほど減少していました。種数や多様性の変化については、今後も注意深くモニタリングしていく必要があると言えます。

【調査者・調査協力者】佐々木雄大・岩知道優樹・巻島大智・忍足龍彦（横浜国立大学）、加藤 将（日本国際湿地保全連合）



ホロムイソウ。
調査時は果実が実っている様子が見られました。



方形区内の植生を調査する様子。



近年、湿原の入り口付近で増加傾向が認められるヨシ（背の高い植物）。



湿原の縁辺に群生するサワギキョウ。